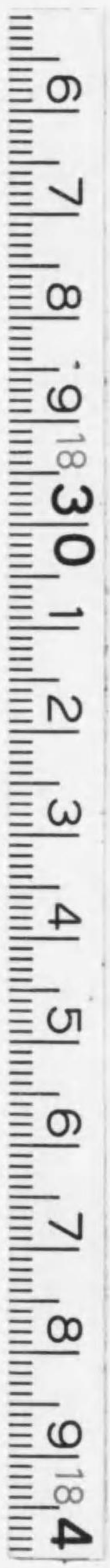




楠木正成

特249

161
教育會編



始

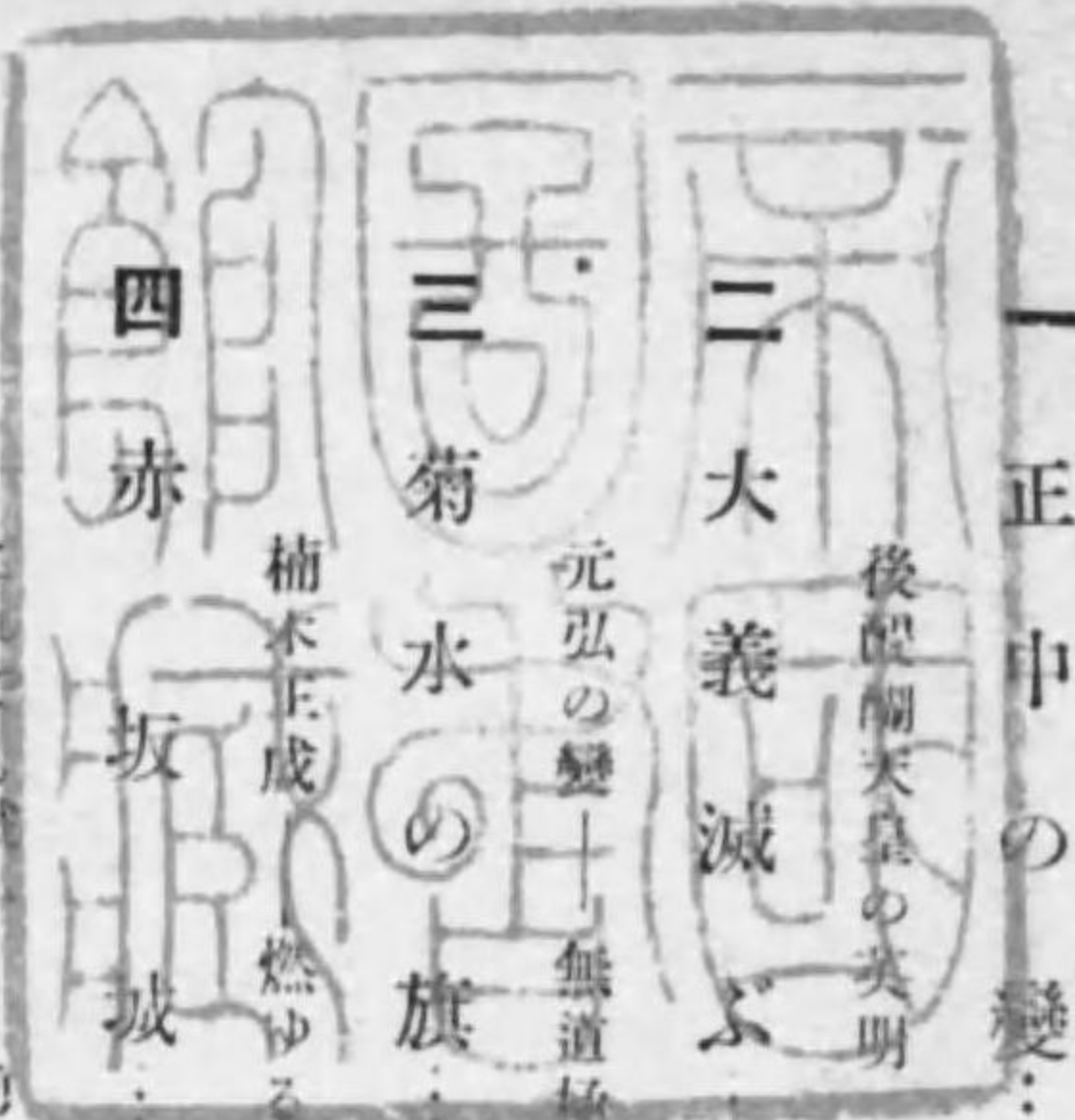


36

5



楠木正成



一 正中の變

後醍醐天皇の英明

お犬さまのお通り——それは一大事

(一)

二 大義滅

元弘の變——無道極まる高時——ふしぎな御夢

(八)

三 菊水の旗

楠木正成——燃ゆる勤王の志——笠置落ち——松の下露——黒木の御所

(三)

四 赤坂城

これでも城か——勇將智將——頭の上から熱湯——正成城を脱け出す——泣き男——

(二六)

五千早城

(四二)

神の如き智謀——壘人形



六 建武の中興……………(四六)

天皇隱岐を遷れたまふ——北條の滅亡——正成兵庫に御轡を迎ふ

七 櫻井の驛……………(五〇)

天下再び亂る——尊氏の敗走——尊氏再び九州より攻め上る——櫻井驛

八 湊 川……………(五七)

七生報國——嗚呼忠臣楠子の墓

年 表……………(六二)

楠木正成

一 正中の變

後醍醐天皇の英明 文保二年に、花園天皇(五十九代)は、御位を後宇多天皇(第九十代)の第二皇子尊治親王にお譲りなさいました。これを後醍醐天皇(第九十代)と申し上げます。その時に、天皇は、御年が三十一歳でありました。

天皇は、御幼少の頃から、大そう英明な御性質でいらつしやいました。それで、御祖父様に當る龜山上皇が、お側を離さずにおかはいがりあそばされたと申します。さうした賢いお方でありましたから、天皇の御位にお即きなされると、間もなく、先づ北畠親房のやうなよい人物を用ひ、どしどしと政治の御改革をおはじめなさいまし

た。

その頃は、鎌倉に幕府といふ役所があつて、天皇に代り、國を治めてゐました。鎌倉幕府は、源頼朝が開いたもので、頼朝の子孫が、代々、將軍といふ一ばん上の役につきました。後に、源氏が滅びて、執権の北條氏に勢力が移りました。執権といふのは、將軍を輔けて政治をする役の名です。

鎌倉幕府の勢ひが盛んになるにつれて、皇室の後威光がだんだん衰へて來ました。北條氏は、天皇の家來の家來でありながら、天皇の大御心にそむき、いつもわがまなことばかりしてゐました。甚だしいのは、天皇の御位の御繼承のことまで、北條氏が口を出すといふ有様でした。英明な後醍醐天皇は、それを大そう残念におぼしめし、どうかして、北條氏を抑へ、政治の實權を皇室にとりかへしたいとお考へなさいました。けれども、それは、中々容易ならぬことであります。ずつと前に、後鳥羽上皇が、同じやうなことをお考へなさいました。それが、北條の方へ知れて、大へんな騒ぎに

なりました。執権の北條義時は、畏れ多くも、後鳥羽上皇を隠岐にお流し申し、後鳥羽上皇の御味方をあそばされた順徳上皇を佐渡に、土御門上皇を土佐に遷し奉つりました。これは、承久の變といつて、歴史上に名高い事件であります。後醍醐天皇は、政治の實權を北條の手から取りかへさうと御決心なさいましたが、承久の變のやうな失敗をしてはならないとおぼしめし、じつと時節の來るのを待つておいでになりました。その中に、よい時節がまゐりました。

お犬さまのお通り 當時の執権を北條高時といひました。これは、まことに愚かな人間で、執権などといふ役目のつとまる者ではありませんでした。政治のことは家來に任せておいて、毎日、贅澤な遊びに耽つてゐました。いろ／＼な遊びの中で、高時の一ばん好きな遊びは、闘犬と田樂でありました。闘犬といふのは、犬の喧嘩です。強い犬をたくさん集め、それに喧嘩をさせて、お酒を飲みながら見物するのです。高時は、毎月、十二回づゝも、かういふ闘犬の會を開きました。さうして、勝負に勝つ

た犬には、錦の着物を着せ、それを籠に乗せて、町中を昇ぎ歩かせました。途中での犬に逢ふと、馬に乗つてゐる武士でも、馬から降りて、恭しく敬禮しなければならぬことになつてゐました。町人などは、みな、

「それ、お犬さまのお通りだ！」

といつて、道ばたに土下座をしました。もし、無禮なことでもすれば、重い罰を受けた。まことにばかげきつた話であります。そればかりではなく、人民がお米やお金を租税に出すかほりに、犬を出してもよい規則が出来てゐたといふから、あきれはてたものです。それほど犬好きの高時でありますから、邸にはいつも数千頭の犬を飼つてゐました。さうして、それらの犬は、りつばな犬小屋に棲み、おいしいものを食べ、人間よりも贅澤なくらしをして、威張りくさつてゐました。

田樂といふのは、その頃京都の方で流行した一種の舞であります。高時は、この舞が大そう好きで、わざわざ京都から多くの田樂法師を鎌倉に招きました。さうして、

夜も晝も酒宴を開き、田樂を舞はせてこれを見物し、あとで、たくさん褒美を法師たちに與へました。

執權ともあらう人が、かうして、政治のことを顧みず、今日は鬪犬、明日は田樂といつたやうに、毎日遊びくらしてゐましたので、家來の者もみんなこれに倣ひ、人民のことなどを少しも考へず、たゞ自分の利益を貪るやうなことがかりいたしました。それがために、鎌倉幕府の財政は、だんく／＼苦しくなり、人民に重い税をかけるやうになりました。人民こそよい面の皮です。いくら働いても、みな税にとられてしまふので、貧乏になり、御飯さへも食へられませぬ。その税金は、何になるかといふと、田樂法師の褒美や、犬に着せる錦の着物になつたり、悪い役人たちがお酒を飲むお金になつてしまひます。これでは、多くの人民が、北條を恨むはずです。人民の中には、北條を非難する者がだんく／＼多くなりしました。

後醍醐天皇は、愚かな高時の行ひのために、北條の信用がなくなつたのをこらんに

なり、

(北條をたふして、政權をとりかへすのは今だ。)

と、お考へなさいまして、或る日、日野資朝と日野俊基とを、こつそりとお召しになり、北條征伐の御相談をなさいました。それは、天皇が御即位あそばされてから、六年ほど後(正中)のことでありませう。

それは一大事 日野資朝と日野俊基とは、天皇の仰せに従つて、北條を征伐するために、諸國の兵を募りました。美濃の土岐頼兼と多治見國長の二人は、眞先に京都へ上つてまゐりました。

ところが、天皇の御計劃は、忽ち京都の六波羅にゐる北條の一族の耳にはいりませんでした。北條の方では、

「それは、一大事だ！ 棄てゝは置けない！」

といふので、すぐに、六波羅の兵をさし向けました。土岐と多治見とは、だしぬけ

に六波羅の兵に圍まれましたので、どうすることも出来ず、自害して相果てました。

資朝と俊基とは、捕へられて鎌倉へ送られました。

後醍醐天皇は、あまりに早く計劃が破れたので、大それた残念にお思ひなさいました。しかし、かうなつては、そのまゝにもすまされません。そこで、わざと鎌倉まで使者をお出しになり、北條高時に御書面をたまはり、

(この度の事件は、朕の知らないことである。朕は、決して北條を討たうなどと思つてゐない。)

とお諭しあそばされました。これを正中の變と申します。

日野俊基は、あくる年にゆるされて鎌倉からかへりましたが、日野資朝は、佐渡へ送られて、後に殺されてしまひました。資朝の子の阿新丸が、父をたづねて佐渡へ渡つたあはれな話は、この時のことでもあります。

二 大義滅ぶ

元弘の變 後醍醐天皇は、初め後二條天皇(四十九代)の皇子邦良親王を皇太子とおさだめなさいました。ところが、親王は、正中の變から二年の後に、御逝去あそばされました。そこで、御自身の皇子の中から、皇太子をさだめようとあぼしめし、鎌倉幕府に御相談なさいました。しかるに、北條高時は、天皇のおぼしめしに従はず、後伏見天皇(三十九代)の皇子量仁親王を皇太子に立て、しまひました。これでは、後醍醐天皇がお憤りなされるのもあたりまへです。天皇は、

(どうしても、北條を滅ぼさなければいけない。)

と、お考へなさいました。しかし、うつかり、そんなことをいひ出して、北條に聞えたら大へんです。また正中の變の失敗をくりかへすだけになります。そこで、天皇は、また、日野俊基と謀り、今度は、僧兵を味方に引き入れようといふお心で、先づ皇子

の護良親王を比叡山の座主となさいました。親王は、延暦寺に入り、大塔といふところにゐて、寺の取締をなさつたので、親王のことを大塔宮と申し上げました。

天皇は、更に、皇后の安産を祈るといふ口實で、京都の近くにある、有名なお寺の坊さんを宮中へお召しになり、北條高時を呪ふお經を讀ませ、その上に幕府を討ち滅ぼす御相談をなさいました。

ところが、天皇の御計劃は、また北條の方へ知れてしまひました。高時は、大に驚き、すぐに人をやつて、御祈禱をした坊さんたちを捕へ、取り調べた上で、烏流にしました。また日野俊基が二度も天皇のお味方をして、北條を滅ぼさうとしたのを憎み、鎌倉へつれて来て、斬つてしまひました。これを元弘の變と申します。正中の變よりも、七年ほど後のことであります。

無道極まる高時 北條高時は、深く後醍醐天皇を怨み、二十萬の大軍を京都にさし向けようとしてました。その大將を命ぜられた二階堂貞藤が、高時を諫めました。

「昔から、君には君の行ひがなくとも、臣は臣の道を忘れてはならぬと申してゐます。天皇が幕府を征伐しようとなされるなら、慎んでそのお言葉に従ひ奉るのがよろしいかと存じます。さうすれば、天皇も必ずお考へなほしたまふことでせう。」

しかし、高時は、貞藤の諫言を用ひせんでした。

北條の大軍が都へ攻め上るといふことが、早くも比叡山の護良親王に聞えました。

親王は、早速、天皇にこれをお知らせして、

「北條の軍が都へはまらない中に、この延暦寺へ行幸あそばされるやうにいひふらして、敵の目を欺き、早く笠置の方へ御避難なされるがよろしい。」

と、おすゝめなさいました。天皇も、

(なるほど、それがよからう。)

と、おぼしめし、護良親王の御計略をお探り上げなさいました。そこで、家來の藤原師賢に、天皇と同じ装束をつけさせ、天皇と同じ御輿に乗せて、延暦寺に向はせ、

御自身には、三種の神器を奉じ、藤原藤房を供におつれになり、こつそりと笠置に行幸あそばされました。さうして、山の上の寺を行在所として、諸國の兵士をおあつめなさいました。

ふしぎな御夢

笠置山の行在所で、賊軍の討伐について、いろくくと大御心を悩ましておいでになつた後醍醐天皇は、或る夜、誠にふしぎな御夢をござらんなさいました。ちやうど御所の紫宸殿によく似た広いお庭に、一本の常磐木がありました。その木は、南の方へ出た枝が、特によく茂つてゐました。さうして、そのよく茂つた枝の下に、南面した玉座が設けてありました。天皇がその前に立つておいでなさいますと、突然、二人の童子が現はれて、御前に跪き、「天下は廣しといふへども、君の御身をかくしたまふところは、この木の蔭より外にありません。どうか、この玉座で、しばらくお休み下さい。」と申し上げて、いづこともなく消え去りました。

お目覺めになつてから、天皇は、

（あゝ、ふしぎな夢を見た。天下は廣しといへども、この木の蔭より外に、身をか
くすところはなほといつた。南の方へ出た枝がよく茂つた木であつた。南の木なら
ば、楠といふ文字になる。楠といふ姓の者が助けてくれるのかも知れない。）

と、お判じなさいました。そこで、お側の者に、
「この近所の村に、楠といふ姓のつく者はゐないか、調べて見るがよい。もし、
さういふ姓の者がゐたら、召しつれてまゐれ。」
と、おつしやいしました。

そこで、お側の者が、近所の村を探して見ますと、金剛山の麓に、楠木正成といふ
者が住んでゐることがわかりました。天皇のお使者から、お召しのお言葉を聞いて、
楠木正成は、大に感激し、すぐに笠置山の行在所へ駆けつけました。

三 菊水の旗

楠木正成 楠木家は、河内の國の豪族といつて、その地方に、古くから勢力のある
家からでありました。正成は、伏見天皇の永仁二年に生れました。幼ない時から、大
人も及ばないほど智慧のある子で、村の人たちに、神童といはれました。力も中々強
く、六つか七つの頃、十五六の少年と角力を取り、一度も負けたことがなかつたとい
ひます。

或る日、正成は、二三人の若黨にかしづかれて、天王寺に参詣しました。正成は、
寺の庭にある大きな梵鐘を見て、若黨たちに、

「だれか、ひとりで、この鐘を動かす者はないか？」
といひ出しました。若黨たちは、

「こんな大きな鐘が、どうして、一人や二人で動くものですか……」
と、答へました。正成は、笑つて、

「お前たちは、大人でもそんな鐘ぐらゐが動かせないのか…… わたしなら、指

一本で動かして見せる……」

といひながら、つかくくと鐘樓にのぼり、一本の指頭で鐘の縁をぐいと押ししました。鐘は少しも動きません。若黨たちは、これを眺めて、

(子どもの力で、大きな重い鐘が、どうして動くものか……)

と思つてゐました。ところが、正成は、指頭に力をこめては押し、押ししてはゆるめ、何度も何度も、同じことをくりかへしました。すると、ふしぎにも鐘が少しづつ動き出して來ました。しまひには、動き方がだんく大きくなり、微かにうなり出しましたので、若黨も、外の參詣人たちも驚いてしまひました。

又正成が九歳の時の話であります。一人の客が、正成のおとうさんの正康に、
「わたくしは、この度、都へ上り、或る宮家へ御奉公することになりました。けれども、田舎育ちのことですから、禮儀作法を知らず、誠に困つてゐますが、一たいどうしたらよろしいでせう？」

と訊ねました。正康も同じ田舎武士ですから、どう答へてよいかわかりません。困りきつてゐるところへ、正成が出て來て、

「そんなことは何でもありません。わたしがよいことを教へてあげませうか？」

といひました。客は(こんな小さい子どもに何がわかるものか……)と思つたものの、よい考へがなくて困つてゐた時ですから、

「どうか、教へてください。」

といひました。正成は、落ちついて、

「その時には、宮家の家臣を見ならはれるが一ばんよいでせう。」

と答へましたので、客も、おとうさんも感心しました。客は、おとうさんに、

「まあ、何といふ賢いお子さんでせう。こんなよいお子さんを持たれて、あなたは、ほんとに、おしあはせなことです。」

といつて、正成をほめたといひます。

かうした話が、残つてゐるのを見ても、正成が幼ない時からいかに賢い子どもであつたかといふことがよくわかります。

燃ゆる勤王の志 成長後、正成は、大そう勤王の志の厚い忠義な武士になりました。鎌倉幕府の勢力が強くて、皇室に無禮な行ひが多いのを見て、早くから非常に憤慨してゐました。

北條の大軍が都へ攻め上るといふうはさや、後醍醐天皇が都を出て笠置山へ御避難あそばされたと聞いて、弟の正季と、

「いよく楠木の一族が御奉公をする時節が来た……」

と、語り合つてゐました。

その時に、天皇のお使者が来て、

「天皇が、楠木の一族を大そう力にしておいでなさる。早く来てお味方をするやうに……」

と、傳へました。正成は、夢かとはかり喜びました。すぐに、菊水の旗をひるがへし、少しばかりの手下をつれて、笠置の山へのぼり、

「楠木正成、お召しによつて、只今、參着いたしました。」

と、申し上げました。藤原藤房が出迎へて、

「おい、そなたが楠木正成どのか……そなたのことを聞き召し、君には大そうお喜びなされてあるぞ……」

と、傳へました。正成は、感激の涙にくれて、

「賊軍がいかに強うございまして、謀をもつて戦へば、少しも恐れるには及びません。勝負は、時の運ですから、どちらが勝ち、どちらが負けるかわかりませんが、たとへ、運悪く一度や二度負けるやうなことがあつても、決して心配御無用です。この正成ひとり生き残つてゐます間は、必ず君の御運が開けるやうにいたします。どうぞ、御安心くださいませ。」

と、申し上げました。正成の言葉を、天皇が如何にたのもしく思召されたこととせう。

正成は、藤房と軍の謀を練りました。その結果、正成は、一たん河内の國へかへり、赤坂に城を築いて、そこで、賊軍と決死の勝負をすることになりました。笠置の山には、敵を防ぐ用意が十分に出来てゐませんでしたから、もつと堅固な壘を築いておいて、そこへ、天皇をお迎へしなければいけないと考へたのであります。

笠置落ち 天皇が、比叡山へおはりになつたとばかり思つてゐた北條の方では、すぐに六波羅の兵士を延暦寺にさし向けました。延暦寺の僧兵たちは、大塔宮のおさしづに從つて、勇ましく防ぎ戦ひました。僧兵たちは、みんな、心の中で、

(われ／＼は、恐れ多くも、天皇を奉じてゐるのだ。)

と、思つてゐますので、中々氣が強くと、目ざましく働きました。ところが、或る日坊さんたちが、天皇を外の御堂にうつさうとした時、山風が吹いて、天皇の御輿の簾

をさつと巻き上げました。すると、今まで天皇とばかり思つてゐたのが、天皇でなく、藤原師賢であることがわかりました。坊さんたちは、失望落膽のあまり、御輿をその場に棄て、立ち去りました。その話が傳はりますと、今まで勢ひよく戦つてゐた僧兵たちの勇氣が、一ぺんに挫けてしまひました。それがために、たうとう僧兵たちの大敗北となり、藤原師賢は、笠置の行在所に逃げ、大塔宮は、一時、奈良の般若寺へおかくれなさいました。

延暦寺に向つてゐた六波羅の北條軍は、忽ち笠置の山に殺到いたしました。官軍は死にもぐるひで防ぎ戦ひました。あまり高い山ではありませんが、要害の堅固なところへ、忠義な武士がたてこもつてゐるので、賊軍も攻めあぐんでゐました。しかしさうしてゐる間に、鎌倉を出た北條の大軍が、追々到着いたしましたので、賊軍の勢ひは、日に日に振ひました。たまく／＼その時、賊軍の中に、笠置山の間道を知つてゐる者がありまして、裏山から忍び寄り、柵に火を放ちました。火は、忽ち山中に燃え

ひろがり、やがて行在所へ燃えうつらうとしました。それがために、今まで頑固に防いでゐた官軍も、たうとう防ぎきれなくなり、みな散々になつて、いづこともなく逃げ去りました。



笠置 五六人のお供をおつれになり、夜にまぎれて、やつとのことで行在所からおのがれなさいました。眞暗な夜でありました。雨は激しく降り、風は強く吹いてゐました。麓の方からは、ひし／＼と詰め寄せた賊軍の関の聲が、もの凄く聞えて來ました。お供の者も、いつしか離れ離れになり、後には藤房と季房の兄弟が二人ぎりになつてしまひました。二人は、左右から、天皇の御手を取つて、とぼ／＼と山を下

りました。

松の下露 天皇は、楠木正成を頼つて、河内の國の赤坂城へ落ち延びたまふ御決心でありました。そこで、藤房と季房の兄弟は、賊軍の者に見つけられないやうに、夜が明けると、木蔭や岩蔭に身を忍ばせ、日が暮れると、とぼ／＼と歩きました。かやうに、晝はかくれ、夜は歩いて、やがて、山城の國の井出の里までまゐりました。それは、笠置を出てから、三日目のことでありました。その間、一度もお食事をなさいません。秋が近くなり、朝夕の寒さが身にしみる時節になつてゐましたのに、雨に濡れ露に沾つた御衣をお召しあそばされたまゝ、夜道の旅をおつゞけなされたのであります。しばし疲れを休めようと、とある木蔭へ立ち寄りたまふた時、天皇のお袖に、梢の露がはらく／＼とかかりました。そこで、天皇は、

さしてゆく笠置の山を出でしより

天が下にはかくれ家もなし

と、お詠みなさいました。藤房は、涙をぬぐひながら、

いかにせんたのむかげとて立ち寄れば

なほ袖ぬらす松の下露

と、御返歌を申し上げました。

一天萬乗の大君が天下に身の置きどころもないとお歎きなされたのであります。これほど畏れ多いことがありませうか？ 憎んでも憎みきれないのは、不忠不義の逆臣北條高時であります。

黒木の御所 北條の方では、血眼になつて、天皇の御行方を探してゐました。その中に、山城の國の住人深須五郎といふ者が、天皇の一行を見つけ出し、六波羅へ密告しました。天皇は、たうとう北條方の兵士のために、粗末な竹の輿に乗せられ、平等院へおはいりになりました。

北條高時は、後醍醐天皇が笠置へおうつりになつたあとで、都に残つておいでになつた皇太子の量仁親王を立て、天皇の御位に即けました。後の人々は、これを光嚴院と申します。臣下の身でありながら、勝手に皇太子を天皇の御位に即けるなど、誠に大それたことであります。しかし、天皇の御即位には、必ず前の天皇が三種の神器を新らしい天皇にお授けなさる例になつてゐます。高時がお立て申した天皇は、三種の神器を受けずに御即位あそばされたので、正常な天皇と申し上げることが出来ません。そこで、高時は、後醍醐天皇を六波羅へお迎へしておいて、新らしい天皇に三種の神器を授けていたゞかうと考へました。けれども、天皇がどうしても御承知なさいませので、しばらく六波羅におしこめ奉りそれから、天皇を隠岐の國へおうつしすることになりました。元弘二年三月七日に、天皇は五六人のお供をおつれになり、都をお出ましになりました。北條の兵士五六百人が、前後に付き添つて嚴重に警固いたしました。都の人々は、だんく、遠ざかりゆく御輦のあとを見おくりながら、

「臣下の身分で、天皇を流し奉るとは何事だ！ 武家の運命ももう長いことはあ

るまい。」

と囁やき合ひました。

御輦が美作の院庄といふところへ着いた時のことでもあります。その夜、庭の櫻の木を削つて、「天莫空勾踐、時非無范蠡。」といふ詩を書いた者がありました。この詩を書いたのは、備前の國の住人兒島高德といふ者でありました。高德は勤王の志の深い武士で、天皇が隱岐に御遷幸あそばされる話を聞き、備前の國と播磨の國の境にある船坂山に待ち伏せ、天皇の御輦を賊の手から奪ひ取らうと企てまし

院庄作樂神社



た。しかるに、道がちがつて、天皇の御輦は、美作の方へ出てしまひましたので、院庄へ駆けつけ、詩によつて、自分の志を天皇にお知らせしたのであります。この詩は、支那の越王勾踐と忠臣范蠡のことを詠んだのであります。たとへ、越王勾踐のやうなことになるつても、忠臣范蠡のやうな人物が出ないともいへないから、心配は御無用です——といふ意味であります。無學な警固の武士には、何が書いてあるのかわかりませんでした。大そうお喜びなさいました。

兒島高德のやうに、途中で天皇をお助けしようと思つた忠義な武士もありましたが、その志も空しく、都をお出ましになつてから、二十六日目に、天皇は、隱岐の島へお着きなさいました。さうして、黒木の御所といつて、山から伐り出した材木を削りもせず、造つた粗末な御所で、波の音や松風の聲を聞きながら、さびしい月日をお送りなさいました。

四 赤坂城

二六

これでも城か 楠木正成は、笠置山からかへると、すぐに赤坂城を築きました。もし、笠置の方が陥落したら、この赤坂城へ、天皇をお迎へ申したいと思ひました。天皇もまた赤坂城へおはいりなさる御決心でありました。ところが途中で、北條の兵士に囚はれの御身とおなりなさいましたので、正成の志は、全く水の泡と消えました。北條高時の命令を受けて、鎌倉からはるげると上京した二十萬の大軍は、まだみな到着しない中に、笠置山が陥ちてしまひましたので、赤坂城を攻めることになりました。

赤坂の城は、三方が平地で、東の方だけがや、高い丘になつてゐました。別に要害のよいところではありませんが、それに、俄づくりの城でありますから、たゞ小さい堀を一すぢ穿ち、堀を一重築いて、中に櫓を三つ四つ並べただけでした。大きさも僅に

二町（約四十米）四方ぐらゐしかありません。そこへ攻め寄せて来た鎌倉の賊軍は、最初からひどく輕蔑してしまひました。

「何だ？ これでも城かい？」

「堀一重に堀一重では、どんな鬼神がこもつてゐたとて知れたものだ。」

などといひながら、堀の中へ飛び込み、切岸の下まで寄つて来て、われ先きにと城の中へ討ち入らうとしました。

城の中では、賊軍が櫓の下へ押しかけて来るまでじつとしてゐました。

「楠木も、この大軍には、手出しが出来ないと見えるな……」

「これでは、この城も一日か二日しかもつまい。」

と、賊軍は、ますます楠木を見くびつて、わい／＼と叫びながら、突進しました。城内の楠木軍は、賊軍が櫓の下へ攻め寄せて来て、押し合ひし合ひしてゐるのを見て急に激しく矢を放ちました。だしぬけに頭上から矢を射かけられてはたまりません。

二七

忽ち死人や負傷者が何百人も出ました。

「これはたまらない。これでは、一日や二日に陥すことも出来なからう。しばらく退いて、考へなほさなければならぬ。」

といひながら、退却をはじめました。それを山の上から眺めてゐた楠木の一隊は、

「それつ！ 敵が退却をはじめたぞ！ かゝれつ！」

と叫びながら、どつと関の聲をあげて打ちかかりました。今まで城の中にばかり氣をとられてゐた賊軍は、楠木の一隊が山の上にかくれてようとは思はなかつたので、不意に攻め立てられた賊軍のあわてようといつたらありません。風に散る芒の穂のやうに、どん／＼と石川河原を目ざして逃げ出しました。城の中の楠木軍も門を開いて打つて出で、山の上にもた一隊と方をあはせ、はげしく追撃しましたので、賊軍の先陣はめちやめちやになりました。

勇將智將 この最初の戦で、楠木正成がいかに偉い大將であるかといふことが、

賊軍にもよくわかりました。正成は、まことに古今稀なる勇將であり、且つ智將でありました。赤坂城を輕蔑してかゝつた賊軍の大將阿曾時治も、正成の巧妙な計略に感じ入り、

(これはうつかりかゝれない。)

と思ひ、一たん退いて、肚田檜原といふところで、評定をいたしました。大ぜいの中には、

「とても一と通りではかなはないから、このへんの様子をよく知つてゐる者を道案内に雇ひ、山や家を焼き拂つて、そろ／＼と城を攻めようではないか。」

といふ弱音を吐く者もありました。

「こんな小さい城を、何萬といふ大ぜいで圍んで、さういつまでもかゝつては、關東武士の恥だ！ 命の惜しい者は退いて見てゐるがよい！ われ／＼だけで城を攻め落してしまふから……」

と、いきまゝ者もありました。それに嘯まされて、賊軍は、再び引つかへして城に迫りました。ところが、城の中は、ひつそりとしてゐます。一人も兵士がゐないやうに見えます。

(さては、昨日の戦に疲れ、弱りはてゝゐるのだな……)

と思ひながら、静かに堀の下まで忍び寄りました。どうしたものか、城の中からは矢を一本も放ちません。賊軍は、いゝ氣になり、四方の堀に手をかけて、乗り越えやうとしました。すると、忽ちその堀がどうつと倒れました。堀に取りついてゐた者は、みな下敷になつて押し潰され、死人が千人以上も出ました。この城の堀は、二重につくられてゐたのです。さうして、外側の堀は、中から縄で吊つてあつて、縄を切り落せば、外側の方へ倒れるやうになつてゐました。賊軍は、またもや正成の計略にかゝつたのであります。

頭の上からざあーつと熱湯 血氣にはやる關東の荒武者たちも、正成の計略にはか

なひません。またあとへ退いて、五六日の間、様子をうかゞつてゐました。城の中は、いつまでたつても、ひつそりとしてゐます。氣の短かい賊將の中には、

「こんな小さい城一つをもてあましたといはれては、人にあはせる面もない。どんな仕掛けがしてあらうと、たかの知れた城だ。今度こそは、無理にでも攻め落してしまはう。」

といふ者がありました。

そこで、賊軍は、三度び城に近づいて來ました。

「この前には、大ぜいで堀へ手をかけたからいけない。今度は、こちらから堀を倒してやらう。」

といつて、堀の下へは寄らず、長い熊手を堀の上に引っかけ、堀の中へ引き倒さうとしました。すると、その時に、堀の上から、長い柄のついた柄杓が、によきによきと何本も出て來ました。賊軍の方では、

「あれは何だらう？」

「何をするつもりだらう？」

と、ふしぎさうに、ぼんやり眺めてゐますと、忽ち頭の上にざあーつと降つて来たものがありました。

「あつ！ あつ！ あつ！」

「あつ！ あつ！ あつ！ あつ！」

賊兵たちは、悲鳴をあげて倒れ伏すやら、頭に手を當て、逃げ出すやら、大さわぎをはじめました。ざあーつと降つて来たのは、あつい、あつい、沸き立つた熱湯でした。しかも、その熱湯の中には、汚ない糞尿が入れてありました。城の中にある楠木軍は、賊軍が堀の側へ寄つて来るのを待つてゐて、沸き立つた熱湯を、柄杓に並々と湛へ、ざあーつと注ぎかけたのです。頭のとつぺんから熱湯を浴びせかけられてはたまりません。またもや負傷者が三百人も出ました。中には、顔も手足も皮膚も焼けた

爛れて、動くことさへ出来なくなつた者もありました。

重ね重ねの失敗に、賊軍も元氣を失つてしまひ、

「これでは、とてもかなはない。もう例へ寄るのはよして、兵糧攻めにしよう。」と、考へるやうになりました。

正成城を脱け出す 赤坂城は、俄造りの小さい城でありました。それに、關東の賊軍が何十萬も攻めて来ようとは思はなかつたので、兵糧の用意などが、十分に出来てゐるわけはありません。二十日ほどたちますと、城の中の兵糧がだんくく乏しくなつて来ました。もう二三日たてば、兵糧が盡きてしまひます。さすがの名將楠木正成も、これには弱りはてました。士卒を集めて、

「たとへ、何十萬の賊兵が攻めて来ようとも恐れはしないが、兵糧が盡きては、この城を守ることが出来ない。一たんこゝを脱け出して、更に新しい計略を立て賊を滅ぼすことにしようと思ふ。わたくしの命は惜しくないが、こゝで死んでは、

もう天皇のために盡すことが出来なくなる。わたくしは、こゝで自害したやうに見せかけ、敵を欺いて城を脱け出さうと思ふ。さうして、命を全ふして、二度も三度も敵を悩ましてゐれば、その中には、天皇の御味方をする者がたくさん多くなつて来る。それが、賊軍を滅ぼす一ばんよい計略だと考へるが、みんなはどう思ふ？」と、心の底を打ちあけて相談しましたので、士卒は、大に感激して、正成の言葉に従ひました。

賊軍は、小さい城のまはりを、十重二十重に圍んでゐます。うまく城を脱け出すことが出来るかどうか、みんなそれを心配しました。しかし、正成は、智謀に長けた名將でありました。先づ城の隅に深い穴を掘り、穴の中に二三十人の死人を投げ入れ、上から薪をかぶせて置きました。二三日たつと、或る夜、大雨が降り、風が烈しく吹き出しました。

「天の助けだ！ 今夜、城を脱け出さう！ みんな、賊兵に見つけられないやうに

二人、三人づゝ出るがよい。」

と、正成は、士卒に命令を下しました。みんなを出してしまつたあとに、一人きり残しておいて、

「この穴の上の薪に火をつけよ！」

と申しつけました。

正成がこそくと賊軍の腕の前を通りますと、番人が見つけて、

「何者だつ！」

と咎めました。正成は、落ちついて、

「大將の身内の者です。道を踏みちがへました。ごめんください。」と答へました。

「いや、さうではあるまい。貴様は、馬盗人であらう！」

といひながら、番人は、うしろから弓を射かけました。矢は、正成の臂のところを

かすりしましたが、傷も負はずに、その場を逃れることが出来ました。

泣き男 赤坂城に火の手がばつと上つたのを、賊軍が眺めて、

「たうとう正成も往生したと見えるな……」

「こんな小さな城だから、たうてい長いことはあるまいと思つたが、いよく投げ出したか……」

「さんざん苦しめられた腹癪だ！ 一人残らず討ち取つてしまへ！」

といひながら、勝鬨をあげて、どつと城の中へ雪崩れ込みました。ところが、城の中には、兵士らしい者の影も見えません。たゞ一人の男がおい／＼と泣いてゐるばかりでありました。賊兵たちは、ふしぎに思つて、

「どうしたのだ？」

とたづねました。

「御主人正成公をはじめ、みな御自害なまつて、わたくしが一人ざりになりました。」

と答へて、おい／＼泣きながら、火の燃え上つてゐる穴を指さしました。穴の中には、たくさんの骨がありましたので、

「それでは、正成も自害してしまつたのか……」

「敵ながらりつばな武士であつたのに……」

と語り合ひながら、引き上げました。この男は、泣く真似が大へんうまかつたので、正成が、何かの役に立つこともあらう。といつて、城の中に使つてゐた者であります。

楠木の泣き男といつて、有名な話です。

正成が一たん赤坂城を棄て、逃げ出したのは、元弘元年十月のこと、笠置山の陥つた翌月であります。

正成赤坂城を奪ひかへす 赤坂城を落した賊軍の方では、正成が自害したものと信

じきつてゐました。

（正成が死んでしまへば、もう大和や河内のあたりには、天皇の御味方をする者も

あるまい。

といふので、少しばかりの兵を赤坂に残して置き、大軍を關東に引き上げさせてしまひました。

赤坂城に残つた賊兵の大將を、湯淺入道定佛といひました。翌年の四月、湯淺入道は、自分の領地になつてゐる紀伊の國から、五百人の人夫を使つて、赤坂城へ兵糧を運ばせました。

それを聞きつけたのが、金剛山にかくれて、時節を待つてゐた楠木正成でした。

「それは幸ひだ。その兵糧をこちらへ頂戴して、ついでに赤坂城を取りかへしてしまはう。」

と、五百騎ばかりの兵を集め、途中に待ち伏せしてゐました。さうして、その兵糧をみな奪ひ取り、米俵の中へ、鎧や兜やその外の戦道具を入れ、自分の家來を半分だけ人夫のやうに装はせ、残りの半分に、わざとそのあとを追ひかけさせました。

さういふ同士討ちの眞似をやりながら、赤坂城へ近づいてまゐりますと、城の中か
らこれを眺めてゐた賊軍は、味方の人夫が敵に追はれて來るのだと思ひ、急いで門を
あけて中へ入れました。城の中へはいると、人夫とばかり思つてゐた者が、俵の中か
ら戦の装束を出して身につけ、一せいに鬨の聲をあげました。湯淺入道があきれはて
ゐる時に、門を破つて侵入して來た兵士の中から、

「楠木正成が只今かへつて來ましたぞ！ 湯淺入道はいづれにござる？」

と叫ぶ聲が聞えました。湯淺入道は、もうかなはないと思つて降参しました。

かうして、正成は、赤坂城を取りかへし、だんく近國を討ち從へ、天王寺のあたり
まで出てまゐりました。その勢ひは、前よりも遙かに侮りがたいものになりました。

赤坂落城 死んだとばかり思つてゐた楠木正成が、ひよつこりと出て來て、赤坂城を
奪ひかへされたのみならず、今にも都へ攻め上るやうな風説が立ちましたので、驚い
たのは、六波羅の北條です。先づ五千騎の兵を集めて、天王寺へさし向けました。と

ころが、正成の計略にかゝつて、忽ち大敗北となりました。

その頃、正成は、金剛山の麓に千早城を築いて、そこに立てこもり、赤坂城を家來の平野將監に守らせました。

六波羅の方では、楠木の勢ひが日に日に強くなるので、鎌倉の幕府へ注進いたしました。

「それは、一大事だ。棄てゝはおけない。今度は、前よりももつと大軍をやつて、楠木軍を絶やしてしまはう。」

といつて、三十萬の大軍をさし向けました。途中で、多くの武士が加はりましたので、都へ着いた時には、總數八十萬人と稱せられました。

阿曾時治の卒ゐる先陣は、先づ赤坂城に攻め寄せました。赤坂城には、今度は前よりたくさんの兵糧を用意しておきました。しかるに、不幸にも、賊軍のために、山の奥から城の中へ水を引く樋を見出されてしまひました。水を止められたために、草

の葉の露を舐めたり、夜氣にしめつた土の上に身體を押し當てたりして、さまざまの苦しみをしましたが、たうとう堪へられなくなり、降参してしまひました。そこで、赤坂城は、再び賊軍の手にわたりました。

五千早城

神の如き智謀 正成が新に築いた千早城の方へは、大佛高直が大將となつて、攻め寄せました。賊兵は、だん／＼増加して、何十萬とも數へられないほど多くなりました。千早城は、南北が金剛山に連なり、東西が谷にしきられてゐて、まことに要害のよいところにありました。しかし、高さが二十四米、まはりが三百米に足りない小さい砦でありました。その中にこもれる正成の部下は、せいぜい千人ぐらゐしかありませんでした。それを何十萬といふ大軍が攻め寄せたのです。しかし、正成は、少しも恐れず、さまざまの計略を用ひて、敵軍を苦しめました。正成は、誠に神のやう

な智謀のある名將でありました。

多勢を特める賊兵たちは、

「いかに正成がえらいからとて、こんな小さな城ぐらゐが何だ！ 一氣に踏みつぶしてしまへ！」

といひながら、先きを争つて、どしどしと木戸口まで上つて來ました。今までじつと静まりかへつてゐた城内の兵は、忽ち高櫓の上へ出て、大きな石を投げつけました。賊兵がおどろきあわてゝゐるところへ、雨のやうに烈しく矢を放ちました。それがために、忽ち死人が五六千人も出ました。

その中に、赤坂城や吉野山の方が陥つたので、そちらへ向つてゐた賊軍が、みな千早城へ加勢にまゐりました。賊兵の数は、ますます多くなり、百萬人以上になりました。百萬人と千人、正成の苦戦が思ひやられます。

赤坂の城を攻めた一人の大將がいひました。

「あの城が落ちたのは、城の中へ引いてゐた水をとめてしまつたからだ。この城も水をとめてしまへば、きつとすぐに落ちる。」

そこで、氣をつけて見ますと、山の上から水を引いてゐるやうに見えませぬ。

「これは、きつと東の山の麓を流れてゐる川の水を、夜になつてから、こつそりと汲みに來るにちがひない。」

といふので、毎夜、三千人の兵をやつて、見張りをさせましたが、いく日たつても、城の中からは、一人として下りて來る者がありません。そのはずです。城の中には、どんな日でも、決して水の渴れない泉がありました。正成は、それを知らずおいて、こゝへ城を築いたのです。正成は、賊兵が川の見張りをしてゐることを知り、或る夜、三百人ばかりの兵を出して、不意に斬り込ませました。賊兵は、忽ち二千人ほど殺されてしまひました。

薬人形 正成の智謀には、百萬の大軍もかなひませぬ。さんざんに惱まされて

しまひ、

「とても力づくでこの城を落すことは出来ない。遠くから取り巻いて、兵糧のなくなるのを待つてゐよう、さうすれば今にきつと赤坂のやうに城を脱け出すかも知れないから、そのときに一度に打ち取つてしまはう。」

と、一時、戦を休むことにしました。

ところが、いつまでたつても城の中から脱け出す様子もありませんし、降参するやうな模様もありません。何しろ正成の智慧がどれだけあるかはかり知れないのですから、賊の方でかへつて氣味悪く思つてゐました。すると或る朝、城の中からどつと関の聲があがりました。何事であらうと、賊兵が城の方を眺めますと、堀の上に、鎧兜をつけて、弓矢を持った敵兵が三十人ばかり立つてゐます。

「それ!! 城の中から出て来たぞ!!」

といひながら、賊兵は雨のやうに矢を放ちました。いくら矢が當つても、堀の上の

敵兵は、平氣で立つてゐました。それもそのはず、これは、藁人形に鎧兜をつけたものでした。さうとは知らず、賊兵たちは、たくさんの矢を放ち、だんぐと側へ進んで行きました。城の中では、じつとその様子を眺めてゐて、もうよい時分と思つた頃、大石を四五十ほど一度に落しました。それで、忽ちまた大ぜいの死人や負傷者が出来ました。藁人形のためにたくさんの矢を失ひ、その上、石に打たれて死ぬなど、笑止千萬な話であります。

これでは、賊軍も手出しが出来ません。楠木の軍があまりに強いので、四方から集まつて来て賊軍に加はつた者の中には、逃げ出してしまふ者がたくさん出来ました。百萬人以上といはれてゐたのが、日毎に減り、しまひには、十萬人ぐらゐになりました。

六 建武の中興

天皇隠岐を遁れたまふ 楠木正成がたつた千人ばかりの兵で、百萬の賊軍を苦しめてゐるのが、大に諸國の武士の士氣を鼓舞しました。われもわれもと官軍に加はり、賊軍を討たうとする者がだん／＼多くなり、天下の大勢は、漸く官軍に傾いて來ました。

都を遠く離れた隠岐の行在所で、一年の間、わびしい日を暮しておいでになつた後醍醐天皇は、遙かにこのことを聞き召し、元弘三年閏二月二十四日の夜、六條忠顯といふ者をたゞ一人おつれになり、ひそかに黒木の御所をお出ましになりました。北條の家來は、嚴重に警固してゐましたが、うまくその目をくらまして、千波の港から、伯耆の國へ渡る商人船にお乗りなさいました。

天皇の御船は、あぶないところを逃れて、やがて、名和の港に着きました。そこに、名和長年といふ勤王の志の厚い武士が住んでゐました。天皇がお召しになりますと、大に喜んでお迎へ申し、船上に立てこもり、近國の兵を集めました。

北條の滅亡 さうしてゐる間に、官軍の勢ひは、ますます盛んになり、勤王の武士が諸國に旗擧げをしました。今まで北條の軍に加はり、しばしば官軍と戦つた足利高氏は、急に官軍の味方になり、六波羅の北條を攻撃し、たうとうこれを滅ぼしてしまひました。

足利高氏の親戚に當る新田義貞も、北條の一味に加はつてゐましたが、ひそかに官軍に心を寄せ、本國の上野にかへつて、兵を擧げました。義貞が謀叛を起したと聞いて、高時は、大に怒り、すぐに征伐を命じました。高時は、心の中で、

(義貞如き者が、鎌倉に弓を引くとは、身の程を知らないといふものだ。)

と思ひ、一と息に吹き飛ばしてしまふ考へでありました。ところが、もう世の中の様子がつかり變つてゐました。鎌倉幕府の信用は、全くなくなり、官軍の人氣が非

常に高まつてゐましたので、關東の武士の中にも、義貞の味方をする者が、意外に多くありました。それがために、高時がさし向けた鎌倉軍は、大敗北をしてすごとくかへりました。

新田義貞は、勝ち誇つた勢ひで、大軍を卒ゐて、鎌倉へ押し寄せました。北條高時も、たうとう悪運が盡き、自害して相果てました。久しい間、天皇の大御心を苦しめてゐた北條が滅びたのは、誠に喜ばしいことであります。

正成兵庫に御輩を迎ふ 六波羅が滅びたといふ知らせが、船上山に達しました。後醍醐天皇は、大に御満足あそばされ、都へ御還幸の用意をお命じなさいました。天皇が船上山を御出發あそばされたのは、元弘三年五月十三日のことであります。

天皇の御還幸を聞いて、楠木正成は、一族郎黨七千人を卒きつれ、兵庫にお出迎へをしました。天皇の御輩は、五月三十日に兵庫へ御到着いたしました。

天皇は、正成をお側へ近くお召しになり、

「今日、めでたく還つて來ることが出来るやうになつたのは、その方が勢王の魁をしてくれたおかげだ。」

と仰せられました。ありがたい天皇のお言葉に、正成は、感激の涙を流しました。

まだ鎌倉の様子がはつきりわかつてゐなかつたので、天皇も御心配あそばされ、多くの人々も何となく気がかりにしてゐました。そこへ、鎌倉から早馬で乗りつけた者があります。それは、新田義貞からの使者でありました。何事であらうか？ と、天皇が義貞の書面を開いてごらんなさいますと、北條高時滅亡のことが記してあります。重ね重ねの吉報に、天皇がどんなに御満足あそばされたことでせう。勤王の將士がどんなに喜んだことでせう。

天皇は、楠木正成を先導として、六月四日に、なつかしい京都に御安着あそばされ、翌五日、御所へおはいりなさいました。隱岐の國へ御還幸後、十六箇月たつてゐました。宮城の二重橋前にある楠木正成の銅像は、正成が後醍醐天皇の先導をして、都

にかへつた時の勇ましい姿を示したものであるといひます。

北條の滅亡により、久しく武家の手に移つてゐた政權が再び朝廷にかへりました。天皇は、年號を建武と改めて、新しい政治の基礎をお定めになりました。それで、これを建武の中興と申します。

七 櫻井の驛

天下再び亂る 建武の中興によつて、武家の手から朝廷に政權がかへつて、やれうれしやと思ふ間もなく、また天下が亂れて、武家政治の世の中に逆もどりをしてしまひました。それは、足利尊氏といふ逆臣が出て、謀叛を企てたからであります。

足利尊氏は、夙くから、北條にかはつて、天下を支配したいといふ野心を抱いてゐました。最初は、北條の家來になり、しばしば官軍を苦しめました。北條の人氣が落ちて來たのを見て、官軍の味方になり、六波羅を攻め滅ぼしました。天皇は、大そ

う尊氏の功勞をお褒めになり、勤王の兵を擧げた武士の中で、尊氏を一ばん重く用ひ、一ばん高い位をお授けなさいました。そればかりでなく、御名尊治の一字を賜りました。そこで、今までは高氏と書いてゐたのを、尊氏と改めたのであります。これほどの御親任を裏切つて、天皇に弓を引くとは、何といふ不忠者でせう。

武家の手に移つてゐた政治が、朝廷にかへつたので、今まで永い間政治に遠ざかつてゐた公卿が、急に天皇を輔けて政治をすることになりました。馴れない仕事ですから、うまく行きませぬ。事務がはかどらないばかりでなく、時々、間違つた裁判や、不公平な賞罰が行はれ、今日さまつたことが、明日はかはるといふこともありました。朝廷の政治に不平を抱き、

「こんなことなら、もとの武家政治の方がよほどよかつた。」
といふ者がだんだん多くなりました。

それを見て、心の中で喜んだのは、足利尊氏でありました。

(こゝで旗擧げをすれば、朝廷の政治に不平を抱いてゐる者は、きつと自分の味方になる。)

と思つて、時節を待つてゐました。

建武二年七月、北條高時の子の時行が鎌倉で騒動を起しました。尊氏は、

「わたくしが時行を征伐しますから、征夷大將軍にしてください。」

と願ひ出ました。天皇は、尊氏の心中を疑つて、お許しになりませんでした。すると、尊氏は、勝手に兵を率きつれて、京都を出發し、鎌倉に下り、時行を征伐し、自ら征夷大將軍と稱して、謀叛の旗擧げをしました。朝廷の政治に不平を抱いてゐる者が、みな尊氏の下に集まりました。

尊氏の敗走 天皇は、大に憤りあそばされ、新田義貞に尊氏征伐をお命じなさいました。新田と足利とは、同じ源氏から出た親戚の間からでありましたが、大そう仲がわるく、お互に悪口をいひ合つてゐました。義貞は、尊氏征伐と聞いて、大に喜び

急いで東國に向ひました。しかるに、足利の軍と箱根に戦つて敗れ、一たん都に引つかへしました。

新田の軍に勝つたと聞いて、足利の味方になる者が急に多くなり、八十萬以上の大軍となりました。そこで、尊氏は、この大軍をひきつれて、都に攻め上らうとしました。官軍の方では、新田義貞、名和長年をはじめとして、多くの大將が總出になり、途中で足利の軍を喰ひ止めようとなりました。楠木正成も五千騎を率ゐて、宇治に向ひました。

賊軍の勢ひがだんだん強くなつて來た時に、赤松則村の子の範資が賊軍に投じて山崎の方面へ攻め寄せて來たので、官軍は、總くづれとなりました。勝ちに乗じて、賊軍は、潮のやうにどつと京都に流れ込みました。そこで、天皇は、比叡山に御避難なさいました。

天皇の御身はどうなるであらう? 京都はどうなるであらう? と、多くの人々が

心配してゐたをりから、陸奥の國にゐた北畠顯家が、義良親王を奉じて、京都に攻め上つてまゐりました。それがために、官軍の士氣は大に振ひ出しました。北畠顯家は東の方から、楠木正成と名和長年は西の方から、新田義貞は北の方から、京都の足利軍を總攻撃しましたので、さすがの尊氏も防ぎきれなくなり、都をすて、九州に逃げ去りました。

尊氏再び九州より攻め上る 足利尊氏が兵庫の港から逃げ出した時には、七千人ほどの部下が従つてゐましたが、船が港へ寄る度毎に減り、九州へ着いた時には、僅かに五百人ばかりになつてゐました。

「もうどうすることも出来ない。潔く腹を切つて死なう。」

と、尊氏がいふのを、弟の直義が止めました。

「戦の勝敗は、時の運です。兵數の多少によつてきまるものではありません。勝つか、負けるか、もう一度運だめしをして見ませう。」

そこで、尊氏は、切腹を思ひとまり、九州の勤王家菊池の軍と戦ひました。

足利の兄弟が菊池の軍に勝つたと聞いて、今まで足利の方へつかうか、菊池の方へつかうかと迷つてゐた者は、みな足利の味方になりました。そこで、足利の軍は、めきめきと勢力をもちかへしました。さうして、再び京都へ攻め上らうと企てました。

そのうはさが早くも京都へ傳はりました。天皇は、大に驚きなさいまして、楠木正成をお召になり、

「早く兵庫へ下つて、義貞と力をあはせ、尊氏を防げ。」
と仰せられました。正成は、畏つて奏上いたしました。

「味方の兵は少なく、その上に疲れてゐます。九州から上つて来る足利の大軍に勝てる見込みはありません。陛下には、もう一度比叡山へ行幸を仰ぎ、敵軍を一たんと都の中へ入れておいて、四方から兵糧の道を絶つてしまふが一ばんよからうと思ひます。」



「お前も、今年も、もう十一歳だ。父の言葉をよく聞き分けてくれ。今度の戦に、父は、討死を覚悟してゐる。生きて再びお前の顔を見ることは叶ふまい。この父が討



ところが、藤原清忠といふお公卿さんが、正成の意見に反対しましたので、正成は「もうこれまでだ。今度の戦には勝てる見込みがない。これが最後の戦だ。」と、戦死の覚悟をさめまし

た。
櫻井の驛 そこで、正成は攝津の國の櫻井といふ驛から十一歳になる自分の子の正行を、河内の國の故郷へ歸しました。その時、正成は、正行に向つて、

死したならば、天下は、必ず足利のものとなつてしまふであらう。それが残念でならない。お前が大きくなつたら、金剛山の城にたてこもり、賊軍と戦つて、君に忠義をつくさなければなりません。それが、お前にとつては何よりの孝行だ。」と話し、菊水の名刀を形見に與へました。さうして、父と子は、泣く泣く東西に別れました。

八 湊 川

七生報國 楠木正成は、僅に七百騎の兵を卒ゐ、急いで兵庫に駆けつけ、新田義貞に對面し、敵を防ぐ計略を語り合ひました。名將の心を知る者は、名將のみです。義貞は、自分の意見が用ひられなかつた正成に深く同情しました。

五月二十五日の朝、霞の晴れ間から、沖合を眺めますと、何千艘とも知れない船が漕ぎ寄せてまわります。更に陸上に眼を轉じますと、須磨のあたりから、鴨越の方面



社 神 川 湊

五八
にかけて、何十本とも何百本とも数へ切れない旗が、ひらひらと朝風に唄いてゐます。海も陸も、盡く足利の軍勢で埋まつてゐるやうに見えます。

大敵といへども怖れず、小敵といへども侮らないのが、名將の心です。正成は、湊川の附近に陣取つて、静かに賊軍の襲撃を待ちかまへてゐました。

やがて、賊船が岸に着きますと、陸上の賊兵がわあーつ！ と関の声をあげました、

賊軍を上陸させないやうにしようと思

つて、新田義貞は、五萬騎の兵に海岸を守らせましたが、どうして、こればかりの兵で、何十萬とも知れない賊軍を堰き止めることが出来ませう。賊軍は、忽ち船を和田の岬に漕ぎつけました。そこで義貞の軍と正成の軍とは、賊軍に距てられてしまひました。

湊川の方面に向つた足利直義は、菊水の旗を眺めて、

(楠木の軍か……よい相手だ。)

と思ひ、大軍の中に圍んで討ち取らうとしました。正成は弟の正季とともに、縦横無盡に、敵を薙ぎ立て追ひ散らしました。しかし、何といつても、味方はたつた七百人、敵は五十萬に餘る大軍です。いかに名將でも、かなふわけはありません。五六時間に十六度ほど戦ひ、たうたう七十三人ぎりになりました。

「もうこれまでだ……」

と思ひ、正成は、湊川の北にある一軒の百姓家にはいりました。鎧を脱いで見ます

と、全身に十一個所も傷を負ふてゐました。主従七十三人、二列に並んで、一度に切腹いたしました。その中に、正成の一族の者が十三人ありました。

最後に臨んで、正成は、正季に向つて、

「何か思ひ残すことはないか？」

とたづねました。正季は、にっこり笑つて、

「七度び人間に生れて、國賊を滅ぼしたいと思ひます。」

と答へました。正成は、うれしさうに、

「自分もさう思つてゐる。それでは、また生れかはつて、一しよに力を協せ、本懐を達するであらう。」

といひながら、刺しちがへて死にました。

かうして、古今の大忠臣楠木正成は、遂に戦場の露と消え果てました。時は、延元元年五月二十五日、正成は、四十三歳でありました。

嗚呼忠臣楠子之墓

楠木正成が湊川で、戦死したといふ知らせには、敵も味方も、何

となく嚴肅な感じにうたれました。賊將足利尊氏でさへも、正成の忠義に感じ、その首を河内の國にある正行の許に送り届けたといひます。天皇は、正成の戦死を悼み、正三位左近衛中將をお贈りなさいました。後に、明治天皇は、更に正一位を御追贈あらせられました。神戸市にある別格官幣社湊川神社は、正成を祀つた社であります。その境内には、水戸の徳川光圀が建てた「嗚呼忠臣楠子之墓」の石碑があります。

楠木正成は、湊川で戦死しましたが、その誠忠無比な志と壯烈極まる最期とは、永く日本國民に深い感動を與へました。正成が示した日本精神は、日本の國と共に、日本の國民と共に、永遠に無窮に傳はるものでありませう。楠木正成は死んでも、その精神は生きてゐます。今日でも生きてゐます。これから何千年も何萬年も生きてゐます。

皇紀	御名	年號	事項
一九五五	伏見天皇	永仁二年	楠木正成生る。
一九七八	花園天皇	文保二年	皇位を御醍醐天皇に譲りたまふ。
一九八四	後醍醐天皇	正中元年	幕府征討を謀りたまふ。(正中の變)
一九九一	同	元弘元年	再び幕府征討を謀りたまふ。八月笠置に行幸あらせらる。九月、高時光嚴院を立つ。笠置陷る。正成赤坂城に據る。
一九九二	同	元弘二年	三月、高時、天皇を隠岐に遷し奉る。正成千早城を築く。六月、高時、日野資朝を佐渡に藤原俊基を鎌倉に斬る。
一九九三	同	元弘三年	閏二月、天皇伯耆に渡りたまふ。五月七日、足利尊氏六波羅を陷る。五月二十二日、新田義貞、鎌倉を陷る。(北條の滅亡) 五月二十三日、天皇船上山を御出發。六月五日、京都に御還幸。
一九九五	同	建武二年	十月、足利尊氏、鎌倉に叛く。 十二月、箱根に戦ひて勝ち、尊氏西上す。
一九九六	同	延元元年	正月、尊氏京都に入り、二月、尊氏九州に奔る。 五月二十五日、楠木正成、淡川に戦死す。

昭和十年四月十五日印刷
昭和十年四月二十日發行

楠木正成 定價拾錢
(送料二錢)

版權所有

文部省
發行人 財團社會教育會

代表者 片岡重助
東京市小石川區丸山町一四

印刷所 三友社印刷所
東京市小石川區關口水道町四一

東京市麴町區裏霞ヶ關四

頒布所 社會教育會館

電話銀座(57)二三二六番
振替東京五五三五〇番

終

